

## 【論文】

# 本郷台地の地形・地質と文学・歴史との融合

鈴木敬一<sup>1</sup>・岡村幸二<sup>2</sup>・三宅あき子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 深田地質研究所

<sup>2</sup> ほんごう街クラブ

Collaboration of the topography and geology of the Hongo plateau with literature and history

SUZUKI Keiichi<sup>1</sup>, OKAMURA Koji<sup>2</sup>, MIYAKE Akiko<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Fukada Geological Institute

<sup>2</sup>Hongoh Machi Club

要旨：本駒込のある本郷台地は地形の変化に富み、歴史や文学作品にも登場する地域である。本稿では本駒込地域の寺町に関して、緑地と生物多様性について議論する。また、地域の特徴を記憶するための手段として俳句をとりあげ、その魅力も紹介する。さらに永井荷風の日和下駄の一節をとりあげ、その周辺の地形や地質を紹介する。

キーワード：本郷台地、永井荷風、生物多様性、緑地、寺町、俳句

Abstract: The Hongo Plateau, where Hon-Komagome is located, is a region rich in topographical variations and has appeared in historical accounts and literary works. We discuss the temple district 'Teramachi' of the Honkomagome area, focusing on its green spaces and biodiversity. It also examines haiku as a means of preserving the memory of the region's characteristics and introduces their appeal. Furthermore, it analyzes a passage from Nagai Kafu's "Hiyorigeta" to describe the topography and geology.

Keywords: Hongo Plateau, Kahu Nagai, biodiversity, Teramachi, Haiku

### 1. はじめに

本駒込地域は、武蔵野台地の東縁部にあり、本郷台の一部にある。本郷台のうち小石川と谷田川で挟まれた台地を本郷台地と呼ぶ。

本駒込を含む本郷台地の特徴として起伏に富んだ地形や寺社の連なる「寺町」といった風情と

古くから文豪が住んだ町という側面もある。

本稿では本駒込周辺の緑環境や生物多様性について示し、さらに文学作品をとりあげ、その場所の地形や地質を紹介する。さらにこの地域の記憶を残すために、世界最短といわれる文学作品である俳句を示して、地域の特性を紹介する。

地形に着目した随筆として日和下駄で紹介さ

れた藪下通りをとりあげ、地形と地質を示し、本駒込地域の魅力を紹介する。

## 2. 本駒込周辺「寺町」における緑環境及び生物多様性

### 2.1 文京区の緑環境の特徴

文京区内の胸高直径 50 cm以上の樹木は 7245 本存在し、樹木本数の多い場所は、小石川後樂園・小石川植物園・豊島岡墓地・六義園・東京大学である。最も多い樹種はイチヨウ、次いで、ケヤキ、サクラ、スダジイ、これら 4 種で全体の 56% を占める。保護樹木は 690 本、おおむね正常な健康度であるといわれている。300 m<sup>2</sup>以上のまとまりのある樹林地は 104 か所あり、1ha 以上樹林地は 16 か所で総面積の 87% を占めている。

### 2.2 「寺町」地域の特徴

千駄木や向ヶ丘を含む本駒込周辺の寺院は、29 を数える。浄土宗が 13 寺、真宗大谷派系が 2 寺、曹洞宗系が 5 寺、天台宗が 3 寺、臨済宗妙心寺派が 6 寺である。本駒込の主な寺社を表 1 に示す。吉祥寺は武蔵野市の吉祥寺が有名であるが、武蔵野市の吉祥寺には吉祥寺はなく、寺は本駒込にある。浄土宗天栄寺の門前は駒込の辻（分岐）であ

り、やっちゃば（青物市場）が栄えていた。門前に「江戸三大青物市場遺跡」の石碑が、門内には「土物店縁起碑（駒込やっちゃば跡）」の碑が建っている。天台宗南谷寺は江戸五色不動のひとつである目赤不動として知られている。

2025 年 4 月に曹洞宗江岸寺にヒアリング調査を行ったところ、境内には桜が 10 数本あり、近所でもよく知られている。中でも黄緑色の花を咲かせる御衣黄サクラは希少である。門前には石橋跡が残っていて、東大下水と呼ばれる水路の痕跡である。文京区観光協会が発行している「山あり谷ありマップ」を参照すると、東大下水の経路を推定することができる（図 1）。東大下水は六義園の池が水源であるという説もある。江岸寺には、鳥類もメジロ、ヒヨドリ、オナガが飛来し、昆虫もトンボ類、アゲハチョウ、クロアゲハなども生

表 1 本駒込の主な寺社

寺名（宗派）	概 略
吉祥寺（曹洞宗）	創建は現在の和倉門付近で、明暦大火(1657)後に現在の地に七堂伽藍を建立した。45年5月に空襲を受けたが、53年～64年に仏殿、書院、本堂が再建。
江岸寺（曹洞宗）	慶長元年(1596)神田駿河台に開山。その後本郷湯島に移転、さらに駒込富士前町で江岸寺門前を構える。
天然寺（浄土宗）	寛永3年(1626)に創設。「然蓮社天誉」の名により天然寺と名付けた。駒込富士神社周辺に「夏に毎夜天然寺門下に“せん蝶”というハナシ家が出て大勢集まり賑やか」とある。
定泉寺（浄土宗）	寛永12年(1635)開山。元和7年(1621)に本郷弓町の地に建立したが、明暦大火のあと現在地に移る。本堂裏の鐘樓の鐘は「月光にほえる響き」と名鐘の一つ。
光源寺（浄土宗）	駒込大観音（おおがんのん）と呼ばれる。創建当時は神田四軒町にあったが、その後江戸城の拡張整備等に伴い、神田寺町に移動し、さらに1648年には駒込の地に納まった。境内には1697年に造設された十一面観音立像がある。享保8年(1723)掘削の井戸は区の非常飲料用防災井戸に指定。



図 1 東大下水の経路

息している。なお、江岸寺の石橋と地形については滝口（2015）に詳しく解説されている。

浄土宗天然寺へのヒアリング調査では、文京区より緑を増やすように要請されており、境内で花卉栽培し、苗の頒布なども行っているとのことであった。また、境内にはかつて井戸が4本あった。

浄土宗定泉寺のヒアリング調査では、中庭に池を作り、鯉を育てていることや、サギの仲間が飛来することもわかった。境内には井戸が1本あり、防災井戸への活用を検討しているとのことである。

臨済宗妙心寺派龍光寺のヒアリング調査は2025年9月に行った。龍光寺周辺は江戸時代には土井邸の屋敷であり、現在のサクラは檀家の協力で植えられたものである。「早春賦」を作詞した吉丸一昌の墓があり、毎年早春賦を歌うイベントを行っている。

### 2.3 生物多様性地域戦略

「生物多様性と都市の健全な発展・再生のバランスを取ることにより、自然と共生した持続可能な社会を実現することを目的」に2019年3月に「文京区生物多様性地域戦略」が策定された。このなかで本郷台地の地形が重要であり、特に湧水地の重要性が指摘されている。本郷台地の崖線には数多くの湧水地が存在する。東側から須藤公園、根津神社、小石川植物園、今宮神社、ホテル椿山荘東京などである。本郷台地にはいくつかの谷があり、谷田川（藍染川）、東大下水（図1）、小石川（千川）、東青柳下水（水窪川）、音羽川、弦巻川、神田川などの河川が存在する。ただし、現在は開渠は神田川だけであり、他は明治から昭和初期にかけて暗渠化された。「文京区生物多様性地域戦略」の中には、生物多様性と文学についても

紹介され、文京区にゆかりのある小説・俳句・短歌等に出てくる生物が紹介されている。

文京区生物多様性地域戦略にうたわれている「自然と共生した持続可能な社会を実現する」ことを具体的に進めるにはどうしたらよいであろうか。最初のステップとしては、物多様性を自らの関係として理解することが重要である。その上で、生物多様性の保全には日常生活において誰にでも実践できることがあることを認識する必要がある。

樹林や草地のうち、大きな面積を占めかつ一定のまとまりをもって存在する公園（庭園等を含む）や寺社あるいは大学等の文教施設において、景観や管理のしやすさ等、人間生活を優先したもののから、生物に配慮されたものになれば、多くの生物が各施設の間を自由に行き来することができ、区全体の生物多様性は大きく向上すると考えられる。移動がしにくい場所には住宅や事業所などの身近なところでビオトープを創ることを促すとともに、まちづくりの中で計画的に緑を配置していくことで、エコロジカル・ネットワークの充実が期待できる。

本駒込付近の緑地と寺社の分布を図2に示す。赤丸が寺社である。寺社の間にも小規模な緑地が存在し、この間をビオトープなどの小規模な緑地で補完すれば、緑地同士の生物の往来が盛んになり、生物多様性の保全につながるものと考えられる。

### 3. 地域の歴史を俳句で詠む

地域の歴史を記憶として長く留めるには、文章として詳述することも大事であるが、単的に思い出すには印象に残る短い言葉で残すことも方策の一つである。日本人は古来より、5音または7

音のリズムに親しんできた。和歌や俳句（川柳）あるいは都逸などである。

図3は江戸名所図会にある駒込地域を描いたものである。左上に富士神社が鎮座し、周囲は畑があるように見える。江戸切絵図（文京ふるさと歴史館（2019）、図4）によれば、日光御成道（岩槻街道・現在の本郷通り）沿いには吉祥寺や天栄寺、江岸寺などからなる寺町、鷹匠の大きな屋敷と畑（百姓地と表記）が目立つ。畑では駒込茄子が栽培され、やっちゃんばで売られるだけでなく、この地域の名産として知られていた。富士神社、鷹匠、駒込茄子、この3つの組み合わせは、川柳として「駒込は一富士二鷹三茄子」と詠まれている。なお、富士神社は最も古い富士講のひとつである。

初夢で見ると縁起が良いといわれる「一富士

二鷹三茄子」は、「無事」「高い」「成す」だから縁起が良い、あるいは徳川家康が好んだ組み合わせなど諸説あるようであるが、発祥は駒込（現在の本駒込）と考えることには納得がいく。

この例のように五七調あるいは七五調のようなリズムは、日本人の心には深く刻まれるようである。ここで俳句を紹介したい。

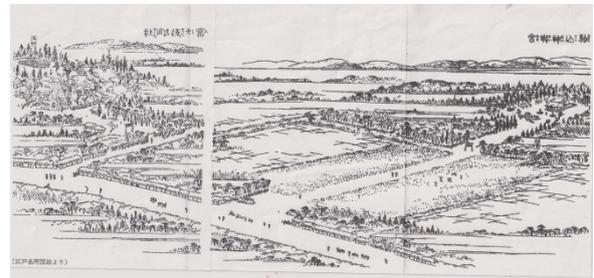


図3 駒込の農村風景（江戸名所図会より）



図2 緑地と寺社の分布



図4 江戸切絵図

黄落や本郷追分一里塚

あき子

御衣黄や散る間際こそさくら色

インヴァネスの乱歩の影や団子坂

最初の句は、千駄木駅近くにある本郷台地の東縁部の団子坂で詠んだ俳句である。インヴァネスは丈の長いコートに、ケープを合わせた男性用の外套の一種であり、スコットランドのインヴァネス地方で生まれたとされている。団子坂は、江戸川乱歩の「D坂の殺人事件」の舞台となった場所である。当時、乱歩は団子坂で「三人書房」という古本屋を経営していた。この小説は名探偵明智小五郎初登場の事件である。

次の句は前述の江岸寺の御衣黄を読んだものである。御衣黄は黄緑色の花を咲かせるが、散る間際には、桜色に変わり、その美しさがとてもはかない。

三つめはかつて一里塚があった場所で詠んだ句である。一里塚は、中山道の最初のものであり、東京大学前の本郷通り（中山道）が本郷追分の分岐点において、本郷通り（日光御成道）と中山道に分かれるようになる（文京ふるさと歴史館、2019）。

乱歩の団子坂、江岸寺の御衣黄、本郷追分の一里塚など、今となっては忘れられかけようとしている地域の遺産をこのような形で残して行くことが重要であると考えられる。

#### 4. 日和下駄と藪下通

永井荷風は文京区小石川生まれの小説家である。随筆や日記なども多く執筆し「断腸亭日乗」は近代日記文学の最高峰とも、荷風の代表作ともいわれている。随筆では「日和下駄」が名高い。副題には「東京散策記」とつけられている。この作品のユニークな点は目次をみただけでわかる。

第一 日和下駄

第二 淫祠

第三 樹

第四 地図

第五 寺

第六 水 附渡船

第七 路地

第八 閑地

第九 崖

第十 坂

第十一 夕陽 附富士眺望

第九章や第十章は崖や坂といった地形に着目し、東京の風景を紹介し、元祖ブラタモリといった趣がある。第九章には本郷台地の東にある藪下通のことが書かれている。

「根津の低地から弥生ヶ岡と千駄木の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂に添うて、根津権現の方から団子坂の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来の中でこの道ほど興味ある処はないと思っている。片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせぬかと危ぶまれるばかり、足下を覗くと崖の中腹に生えた樹木の梢を透して谷底のような低

い処にある人家の屋根が小さく見える。」(原文ママ)

実際にこの場所を歩いてみると往時の雰囲気は薄れてきてはいるものの、荷風が歩いた当時の面影は十分に残している。この荷風が興味を示した道は藪下通りと呼ばれている。

図5は藪下通り周辺の治水地形分類図であり、藪下通りは赤色の波線で示してある。かつての藍染川(現在は暗渠)の左岸側の段丘崖の上に位置している。団子坂は濃い青色の波線で示した。藪下通りの北の端には森鷗外の旧居があり、現在は文京区立森鷗外記念館になっているが、当時は「観潮楼」と呼ばれていた。荷風の記述にあるように藪下通りは根津神社(根津権現)まで通じている。

治水地形分類図によれば、藪下通りは段丘面と丘陵地という地形区分の境界になっている。崖



図5 藪下通り周辺の治水地形分類図

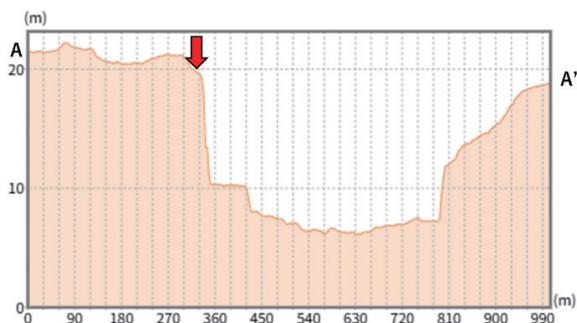


図6 藪下通りの地形断面

は紫色で表記されており、藪下通りは荷風の分類による崖ではなく「山地」に分類されている。

治水地形分類図による崖は「段丘面の縁辺にある低地と段丘面、あるいは低い段丘面と高い段丘面の境目の比高差5m以上の急な斜面」と定義されている。一方、山地は「起伏が大きく、周囲の低平な土地と明確な山麓によって分けられる土地のことをいい、治水地形分類図では、火山地や丘陵地を含めた」地形をいう。崖と山地の違いは必ずしも明確ではないようである。

図6は、図5に示したA-A'断面の起伏である。藪下通りは矢印の位置になり、荷風が書いているように「片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせぬかと危ぶまれるばかり」というほどの傾斜である。治水地形分類図をよく見ると、このあたりには切土や連続盛土といった表記も見られる。この斜面は自然ではなく人口改変による急傾斜の可能性が高いと考えられ、「法面」と呼ぶのが正しいと考えられる。

森鷗外旧居の観潮楼については「市中の屋根を越して遥に見えるとやら、然るが故に先生(鷗外のこと)はこの楼を観潮楼と名付けられた」(原文ママ)と書かれている。当時はこの場所から東京湾を望むことができた。荷風は団子坂の別名を汐見坂と書き、訪れた時は暗くて海は見えなかったとも記している。現在、この場所を訪れても高層建築に阻まれ、上野の山さえ見ることができない。このことは荷風が書いた描写とは大きく異なる点である。

荷風は次のようにも書いている。「一際高く漂い来る木犀の匂いと共に、上野の鐘声は残暑を払う涼しい夕風に吹き送られ、明放した観潮楼上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである」(原文ママ) 鐘声とは寛永寺の鐘の音であり、ここからの市中の眺望は「蒼然たる暮靄に包まれ、

巴里の夜景の色彩のようである」と評している。聴覚、視覚まで利用して地形を楽しんでいるように思えて、荷風の感性の豊かさに驚かされる。

荷風は観潮楼を辞すと「千駄木の崖道をば根津権現の方へ下り、不忍池の後ろを廻ると、ここにも聳え立つ東照宮の裏手一面の崖に、木の間の星数えながらやがて広小路の電車に乗った」と書き、当時の東京市電で帰宅したようである。

藪下通りを根津神社まで下ると、現在の不忍通りから上野動物園の脇を通り、東照宮の下へいたる道は現在も存続している。ここも崖となっているが、旧藍染川の右岸である。東照宮の下から、弁天堂の前を通り過ぎ、広小路へ至る道は、1917年から1924年の地形図（谷口，2022）を参照すると、市電が走っていることが確認できるが、荷風が歩いた1915年にはまだ市電が無かった可能性がある。荷風は当時、現在の新宿区余丁町14-3に住んでいた。ここは現在の都営新宿線曙橋駅と、大江戸線若松河田駅のほぼ中間地点に位置している。東京市電の路線図を参照すると、不忍池のほとりにある上野公園停留所から上野線で南へ下り、万世橋停留所で御茶の水線に乗り換えて飯田橋停留所へ、さらに角筈線で河田町停留所で下車すれば自宅に戻ることができる。

以上は、推定の域を出ないが、荷風が鷗外を訪ねた時の日記を参照しようとしたが、断腸亭日乗（永井荷風，1980）は1917年からの執筆なので、この日のことは詳しくはわからなかった。

## 5. 藪下通付近の地質

図7は藪下通付近の地質地盤図（産業総合技術研究所，2024）である。図5に示した段丘面は武蔵野Ⅱ段丘堆積物に相当し、崖の部分は立川段丘堆積物およびわずかであるが上泉層も確認で

きる。立川段丘堆積物がみられる領域は、旧藍染川の水衝部に相当し、大きな蛇行の跡後から考えても、洪水時にはかなりの流速・流量であったものと推定される。

図7の赤線部分の地質断面を図8に示す。近傍のボーリング柱状図も併記した。柱状図を参照すると盛土の下にローム層が被覆し、その下位に武蔵野Ⅱ段丘堆積物がある。この段丘堆積物は古多摩川の流れによる砂礫の運搬・堆積作用で形成されたものである（木村，2023）。この地層は上下に分かれ、上位が礫混じりの砂層、下位は礫層になっている。N値の表記がないが、PS検層の値を参照すると、この境界の下位でS波速度が300m/sとなっており、この深度あたりが工学的基盤となる。武蔵野Ⅱ段丘堆積物の礫層は帯水層になっており、砂質シルトの上泉層が不透水層となっている。ちょうど崖の法尻付近が礫層とシルト層の境界になっており、小規模な谷には湧水が見られる。図9にこの付近の陰影起伏図を示す。湧水を利用した大名屋敷の跡地は現在は須藤公園や文京区立千駄木ふれあいの杜として整備されている。

近年は、江戸の古地図などを片手に街歩きすることが認知されてきた。しかし、地形や地質に

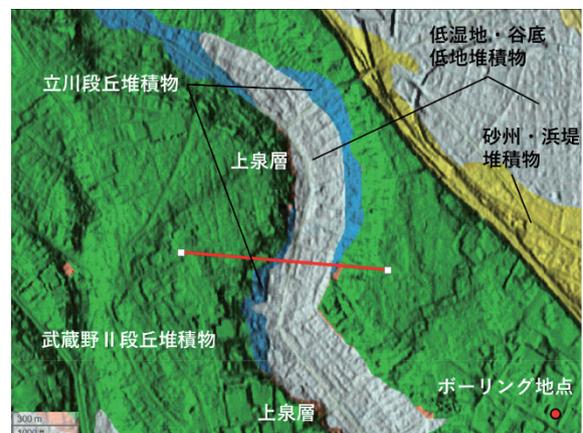


図7 藪下通付近の地質地盤図

着目して街歩きすることは、NHKのブラタモリはその先駆けともいえるが、まだまだ浸透していないように見える。ここで紹介したような観点で、この地域を見てみると新たな魅力を発見することになると考えられる。

と文学や歴史の観点から検討した。この地域の新たな発見につながることを期待したい。

### 5. おわりに

本駒込は豊島区の駒込に対し、本郷の駒込という意味で名付けられた（文京ふるさと歴史館，2012）。本駒込は東京メトロ南北線の駅ができたが、六義園以外はあまり有名ではなく、その魅力が埋没しているように思われる。この地域の魅力を発信するために地形や地質

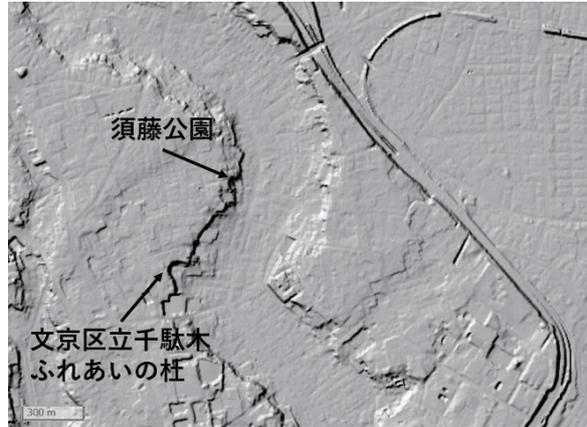


図9 陰影起伏図

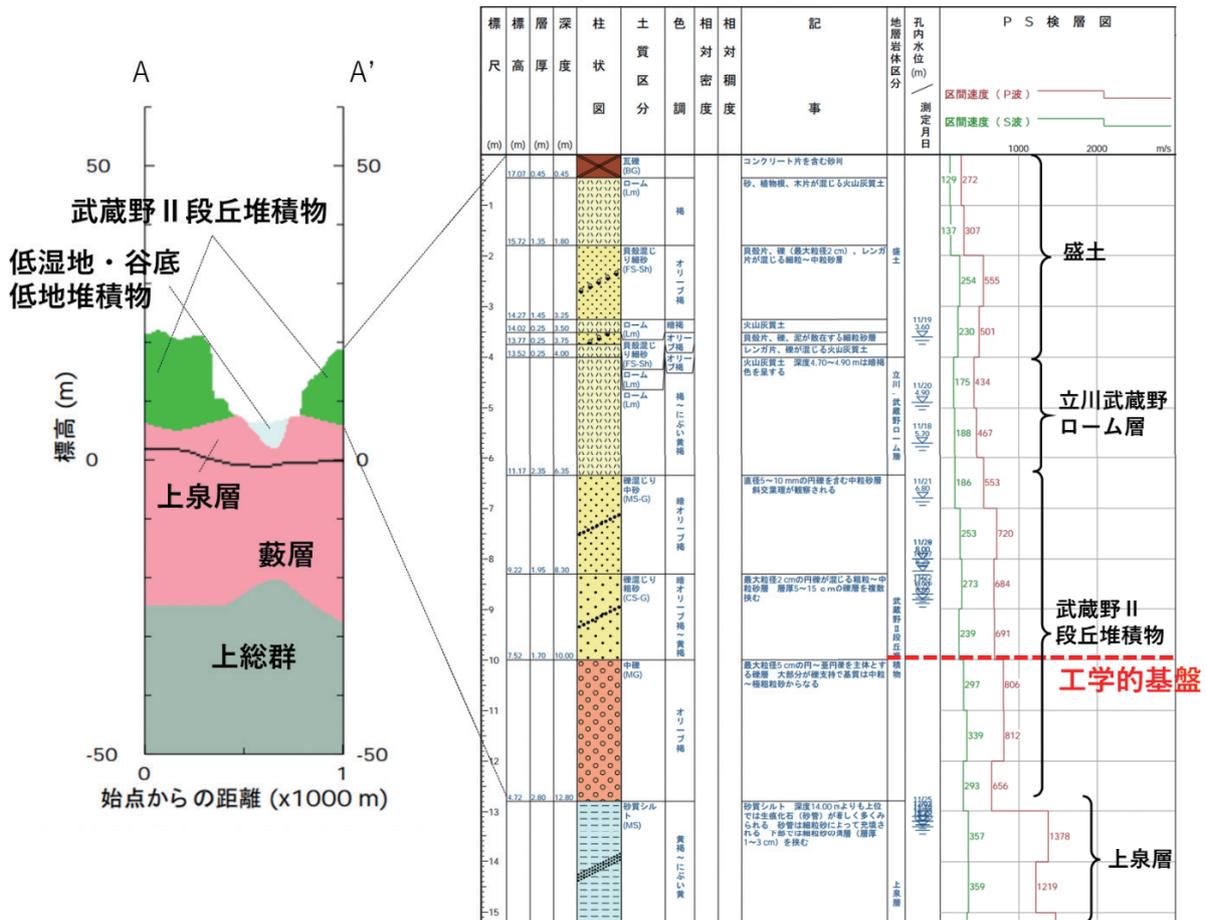


図8 地質断面図と近傍のボーリング柱状図

## 文献

文京ふるさと歴史館（2008）：ぶんきょうの坂道（改訂版），168p.

文京ふるさと歴史館（2012）：ぶんきょうの町名由来（改訂版），217p.

文京ふるさと歴史館（2019）：文京の切絵図

文京区（2019）：文京区生物多様性地域戦略  
<https://www.city.bunkyo.lg.jp/b037/p005062/index.html>（最終閲覧：2025年10月31日）

文京区観光協会（発行年記載なし）：文京区山あり谷ありマップ

永井荷風（1986）：日和下駄，荷風随筆集（上），岩波書店，5-102.

永井荷風（1980）：断腸亭日乗，岩波書店

国土地理院：地理院地図（電子国土web），  
<https://maps.gsi.go.jp/>  
（最終閲覧：2025年10月31日）

谷謙二（2022）：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」，<https://ktgis.net/kjmapw/>  
（最終閲覧：2025年10月31日）

木村克己（2023）：文京区本駒込周辺の地形を読み解く：本郷台の成り立ちと洪水・地震ハザード，深田地質研究所年報，No.24，87-108.

滝口志郎（2015）地形散歩，深田研ライブラリー，No.167，47p.

産業技術総合研究所（2024）：都市域の地質地盤図，<https://gbank.gsj.jp/urbangeol/>  
（最終閲覧：2025年10月31日）